

2018.11.25 王であるキリスト

## わたしが王だとは、あなたが言っていることです

ヨハネによる福音 18:33b-37

（そのとき、ピラトはイエスに、）「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」

### 説教

きょうの福音はローマ総督のピラトがイエス裁判のいきさつ、罪状であるユダヤ王について尋問し、それに対するイエスの答弁が記録されています。同じ場面のマタイ福音書では裁判中のピラトの心情をゆさぶるかのようピラトの妻も登場しています。

**一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」マタイ 27 : 19**

ピラトはイエスの無罪を確信していたのか、そうではなかったのか、妻の伝言はピラトの心情に影響したのかしなかったのか、ほんとうの本当はわかりません。また、イエスがピラトの尋問に対して、のらりくらりと答えをはぐらかしているようにしている本意もわかりません。でも福音書（朗読個所の

次節) によるとピラトはイエスの無罪がわかっているようです。しかし、実際のイエスは十字架刑となりました。イエスの「真理」についての抗弁に対してピラトはつぶやきます。

ピラトは言った。「真理とは何か。」ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。」ヨハネ 18:38

-----